

研究論文の受賞報告

「臨床薬理研究振興財団賞 学術論文賞」

天使病院 薬剤科主任 相馬 まゆ子

臨床薬理研究振興財団賞 学術論文賞を受賞して

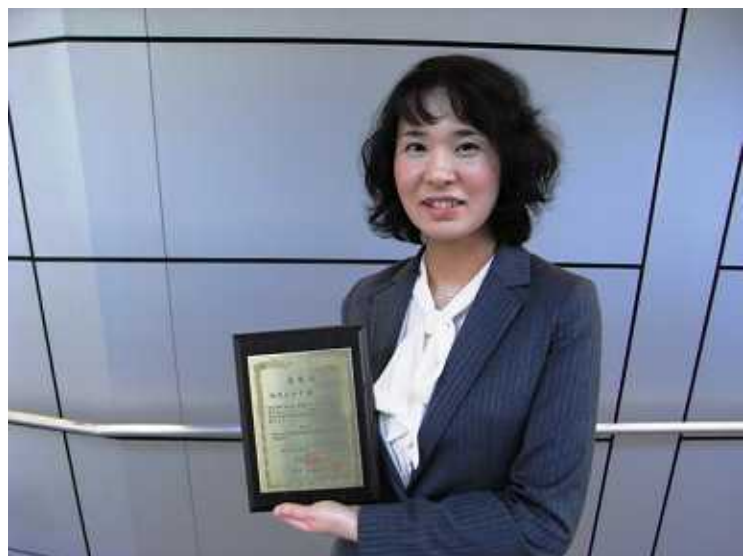
天使病院は、皆様ご存知のとおり地域周産期母子医療センターの指定を受けており、合併症妊娠などの重症例を含む年間約 1,000 件の分娩数があります。私は産科病棟を担当しており、切迫早産で入院している妊婦に対する薬剤管理指導は主な業務の一つです。当院の産科患者の特徴として、双胎妊婦の出産は年間約 40 件と多く、また切迫早産治療を必要とする妊婦が大勢いることが挙げられます。当院周産期母子センター長・副院長である産科医師の吉田 博先生と薬剤管理指導について議論を重ねるうちに、切迫早産治療の際に最も多く使用されるリトドリン塩酸塩(ウテメリン、ウテロン)の血中濃度に基づいた切迫早産管理ならびにリトドリンの適正使用の臨床研究を試みることになりました。

リトドリンは 1986 年からわが国で使用されている子宮収縮抑制薬ですが、血中濃度に基づく双胎妊娠管理についての報告はほとんどなく、また、リトドリンが使用された妊婦から生まれた新生児のリトドリンの影響についても知られておりません。そこで、文献調査を開始したところ、故藤本 征一郎先生(元天使病院長・北海道大学名誉教授)が執筆された論文がありました。これによると、単胎妊婦ではリトドリンが胎児へ移行することは報告されておりましたが、双胎妊婦の情報は特にありませんでした。そこで、産科と薬剤科の共同研究として、双胎妊婦における母胎間移行率について検討することになりました。この結果をまとめたのが今回の受賞論文である「Maternal-to-fetal transfer of ritodrine in twin pregnancy」です。内容の詳細は省きますが、母体への治療濃度とほぼ同じ濃度のリトドリンが胎児に移行していることが判明しました。

また、この論文を準備している最中、厚生労働省が発令する医薬品・医療機器等安全情報 NO.285(2011 年 11 月)において、リトドリンの胎児及び新生児に対する心不全の副作用が通知されました。これは、私たちが進めている研究データの蓄積と公表が、今後のリトドリンの適正使用指針を構築し、さらに分娩後の新生児への適切な診断に貢献できるものと考えています。このような研究を支えていただきました、産科医師ならびに病棟スタッフの皆様、また薬剤科 佐々木 洋一科長、薬剤科スタッフの皆様へ深く感謝いたします。

現在私は、毎週金曜日に開かれる、産科・小児科・NICU 合同カンファレンスに参加し、母子ともに安全で有効な薬物の治療管理に取り組んでいます。また、日本病院薬剤師会が定めている、妊婦授乳婦薬物療法認定薬剤師の資格を得ることを目標として、研鑽を続けたいと思います。

なお、これまで発表した論文と研究内容を北海道薬科大学に申請し、2014 年 1 月 10 日に博士(薬学)の称号を授かることとなりました。研究論文の作成にあたりご指導いただきました、副院長 吉田 博先生、北海道薬科大学准教授 今田 愛也先生(元天使病院 薬剤情報科長)に心からお礼申し上げます。



2013 年 1 2 月 6 日 授賞式にて
(日本臨床薬理学会学術総会・東京国際フォーラム)